

食べる 
 つながる 
 育つ 

命を学ぶ食農保育 (2) 保育者のあり方を問う

倉田 新

1 自然がやって来る

かつてペスタロッチは「生活が陶冶する」と言いました。幼児期の人間形成で重要なことは抽象的な知識ではなく、実際の生活の中での直接体験が極めて重要であるということでしょう。ペスタロッチは感覚器官を十分育てた後に理性の教育へと展開すべきと主張しています。私は「子ども未来財団」の保育所における食育のあり方に関する研究班の一人として「保育所における食育に関する指針」いわゆる「食育保育指針」を作成しました。これは厚生労働省の地域において適切な食育のシステムを構築するために「食を通じて子どもの健全育成（いわゆる「食育」の視点から）のあり方に関する検討会」と並行して具体的に作成した指針です。私が特に大切にしたのはこの豊かな直接体験と食農文化でした。食育を通して、耕すことを知らずして食べる現代社会の問題や、物流的にも意識や精神的にも離れてしまっている食と農の関係を見直し、日本の失われた文化を再構築する必要があると考えたからです。子どもたちに大切なのは教室の目の前で作物が育つことです。それは倉橋惣三先生の言う

「生活を生活で生活へ」ともつながることでしょう。幼児の生活をさながらにして、幼児の自己充実を図ることが幼児教育の本来のあり方であると述べているのですから、畑や田んぼが園庭にやって来るのです。

フレーベルは『人間の教育』の中で「自分自身の庭を作ること。特に何らかの収穫をあげるために庭作りに従うことが、この年ごろでは重要な、いや全く特別に重要なことである。なぜならそこでこそ、はじめて、人間は、もろもろの成果が、有機的な精神の法則に従うとともに、必然的な制約を受けた方法で、自分自身の行為から生じてくるのを見るからである」と言っています。教室の目の前に命の環境があれば、園の田んぼで稲が根付くのと同時に、子どもたちや保育者の心の中にもしつかりと食農保育・教育は根付いていきます。日本の保育が他の国に誇れるものはコンピュータではなく、それは「自然との共生」と「命の環境」であり、美しい四季の中でじつくりと熟成されて、命や感性を育むことであると思うのです。

2 豊かな育ちの環境を再生する

現代の子育て環境で失われたものは何でしょうか。それは地域の育ち合いの環境です。幼稚園や保育園がそうした地域のコミュニティを再生していくことはとても重要なことなのだと考えます。『ぐりとぐら』の作者の中川李枝子さんは「ドリトル先生のような園長になって、たくさんの動物に囲まれた世界一の保育園を作りたい」と言いました。「日本の社会を駄目にしたのは幼稚園の真つ平らな園庭だ。園庭は凸凹のほうが面白い。底なし沼があってもいいくらいだ」と豪語したのは宮崎駿監督です。平らに整備されて小石一つ無いように

毎朝竹箒で掃いている園もあるでしょう。しかしそれでは子どもたちの育ちは無味乾燥です。大切なのは命の環境です。何もない園庭、それを肅々と変えていくこと。すると農作物だけでなく、虫やカエルや鳥やたくさんの生物たちも集まってきました。そればかりか食農保育を通して、多くの地域の人や社会ともつながり、さまざまなかわりが生まれてくるのです。それらがすべて子どもたちの豊かな育ちの環境です。ビオトープ、ビオは命、トープは場所なのです。子どもたちの命が育つ場所、食農保育を通じて保育に自然や地域を取り込むことで、自分と物、自分と自然、自分と人、自分と社会との世界が豊かに展開され、そしてそのエナジーから自分自身の生き方を学んでいくのです。

保育者・教育者は貧困な命の環境を変えられるだけのエンパワーメント (Empowerment) を発揮しなくてはいけないのです。それには私自身がどう考え、どう保育をデザインするのか、デザインしたらどう具体的に行動するかが大事なのです。考え方次第で環境は変えることもできますし、反対に考えなければ環境に流されてしまいます。乗り越えなくてはならない最大の壁は常に自分自身の中にあるものです。

3 保育・教育をどう直す一つの視点

保育の五領域は生きる力の基礎を培う観点です。食育の五項目は「食と健康」「食と人間関係」「食と文化」「命の育ちと食」「料理と食」です。食育や食農を通して大切なのは保健・栄養指導だけではなく、従来の保育・教育の実践が子どもへの最善の利益になっているかをとらえ直すことでもあります。ゆつたりとした食農保育の実践は保育を子どもへの生活本位の展

開へと活性化させるものであると考えます。食農保育を進めるにはすべての職員員の知恵と経験と協力が必要です。何よりも子どもたちの生活の場に自然を開示することが必要です。

東京の郊外で食農保育を実践している八国山保育園では、稲を収穫した後、の田んぼに今度は麦の種を蒔きました。十一月に入り園庭の田んぼや畑には一面真っ白な霜が降りていました。そのころ、麦は硬い粘土層を割って小さな芽を出しました。早朝から園庭で遊んでいた五歳児の男の子が大声で叫びました。「すごい！ みんな来て！ 麦が霜柱を持ち上げている！」。そうです。麦の新芽が厚い霜柱を地面からぐんぐん押し上げていたのです。集まった子どもたちはその様子を見て「麦って、力持ちなんだねー」「みんなで持ち上げてるよ」と感心していました。「そうだね。こんなに小さくても力を合わせれば大きな力になるね」「こんな力持ちの麦を食べるとどうなるのかな」と担任。「元気になる！」と子どもたち。早朝の大発見でした。

レイチェル・カーソンは『センス・オブ・ワンダー』の中で「子どもたちが、このような妖精からの贈り物に頼らずに生来の驚異の感覚を生き生きと保ち続けるためには、その感覚を分かち合える大人が少なくとも一人、その子どももの傍らにいて、われわれの住んでいる世界の歓喜、感激、神秘などをその子どもと一緒に再発見する必要がある……」と言っています。食農保育における保育者のあり方は、自ら耕すのはもちろん、子どもらの傍らにいて言葉を拾い、ドキュメンテーションを取り、温かく見守ることではないかと思うのです。



(東京都市大学)